

## オロカとオロソカ（その四）

我 妻 多 賀 子

これまで、小誌に、過去三回にわたって、論述をして来た「オロカとオロソカ」の（その一）のところでも、すでに述べたが、形容動詞のオロカは、現在、左のように盛んに使われている。

オロカは、「知恵が足りない、理解力が不足している」という「愚」の意味で、日常普通に用いられている言葉であるといえる。

こんな失敗をするなんてなんとオロカだろう。  
あの当時は自分はとてもオロカだった。

彼の仏道修業がオロソカだろうとは思わない。  
式の準備がオロソカだった。

A君がオロカであるはずはない。  
怠けてばかりいるとオロカになるにちがいない。  
その考えはオロカだ。  
オロカな真似はよせ。

君のやり方はオロソカで困る。  
命をオロソカにはいけない。  
仕事がおロソカなのは皆に迷惑をかけることになる。  
勉強がおロソカならば将来に影響するだろう。

つまり、右の六つの例文で明らかのように、現代語の

などのように、「いい加減だ、ぞんざいだ、疎略だ」

を表す「疎」の意味で、これまた日常語としてよく使われている。

要するに、現在では、オロカ(愚)とオロソカ(疎)との間に、截然とした意味の使い分けが認められることになる。ところが、古文を読んでいると、オロカ(愚)をオロソカ(疎)の意味で用いている文に遭遇することが少なくない。そこで、必然的に、次のような疑問が湧いてくる。

○オロカは「愚」の意味を表す時と「疎」の意味の時とで、何か使い分けがあったのであろうか。

○中世までオロカは「疎」の意味でも用いられていたというが、実際の文献で見ると、どの辺までのことになるのか。

○中世以降になると、オロカは「愚」の意味だけになつてしまったのであろうか。

○オロソカには「疎」の意味だけで、「愚」の意は全く含まれていないのだろうか。

右のようないくつかの疑問点を解き明かすべく、今まで、大きく左の四つの章に分けて、その研究結果を述べて来た。

一 はじめに

二 オロカの通時的考察 (上代〜中古)

三 〃 (中世以降)

四 オロソカの通時的考察 (上代〜近世)

そこで今回は、これまでのことをいよいよまとめるところにし、形容動詞オロカとオロソカの比較考察を行つてみることにしたい。

以下、右に続ける形で、左のような新たな章を設けて、ながめて行くことにする。

五 オロカとオロソカの比較考察 (一)

まず、意味内容にとらわれず、単純に、オロカおよびオロソカの総用例数を調べてみることにする。

このことについては、すでに、前号の「オロカとオロソカ」(その三)のところでも少し触れたが、上代から近世までの主要文学作品における両語の使用頻度数は、次に記す一覧表で明らかのように、オロカの方が、断然オロソカを上回っている。△注1▽

平家物語	宇治拾遺物語	発心集	大鏡	源氏物語	宇津保物語	三宝絵詞	竹取物語	古今和歌集	日本靈異記	作品名
二八	一七	五七	一三	一三一	三一	一五	五	二	三	オロカ
二	一	一	一	九	六	一	一	一	一	オロソカ

近松作品	西鶴作品	天草本平家	史記抄	謡曲	増鏡	徒然草	沙石集	十訓抄	正法眼藏
二〇	二六	一二	九	三六	一〇	三一	六九	二八	三五
二	三	六	一	二	一	三	八	一	九

さて、オロカとオロソカの表す意味がすべて同じとい  
うわけではないので、右の表を元に、ただちにこの二語  
の比較考察をすることは出来ないが、ともかく時代やジ  
ヤナルなどあらゆる面から見て、オロカの方がオロソカ  
を数の上で、凌駕していたことは明らかである。

さらにまた、右に掲げたものの外、専らオロカのみが  
使われ、オロソカの用例は全く出て来ないという作品を  
挙げてみると、主なものだけでも、『万葉集』『大和物  
語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『和泉式部日  
記』『狭衣物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『堤  
中納言物語』『今鏡』『今昔物語集』『水鏡』『とりか  
へばや物語』『古本説話集』『保元物語』『曾我物語』  
『義経記』『御伽草子』『ぎやどべかどる』『雨月物語』  
『浮世床』など、非常に多くを数えることが出来る。

要するに、オロカとオロソカは比較するのがためらわ  
れるくらい、使用度数に開きがあることになる。

それでは続いて、類似した意味を表すオロカとオロソ  
カの用法上の差について、細かく見て行くことにするが、  
その前に、これまでオロカ・オロソカをどのように意味  
分類して来たのか、用例を挙げながらふり返ってみるこ  
とにしたい。

まず、オロカの方からながめることにする。

この語は、その用法から見て、左の六グループに分類  
して考えてみた。

### I 「疎」・・・いい加減である、疎略である

上代から近世まで使われているが、時代が下るに  
つれて、用例数は減少して来る。また、形式的に  
は、左記の例文のいくつからも明らかのように、  
下に否定表現を伴ったり、反語文中で用いられた  
り、仮定の意味を示す場合が多い。

○おろかに(於呂可尔)それは思ひし乎敷(をふ)  
の浦の荒磯のめぐり見れど飽かずけり  
(万葉集・卷十八・四〇四九)

○おとど御座ひきつくりはせなどし給ふ御用意おろ  
かならず。  
(源氏物語・藤裏葉)

○観音ノ助ケ給ハムニ将ニ愚ナラムヤハ。  
(今昔物語集・卷十六ノ九)

○この人の御心おろかにあはあはしからましかば、  
いかに胸いたからまし。

(とりかへばや物語・下)

○おろかにはあらぬ涙の袖の上に秋おく露や玉はな

すらん

(続後拾遺・卷十五・一〇二二)

○わづかに二つの矢師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。

(徒然草・九十二段)

○「御辺の父の御は大小事申あはせし人なれば、せろかに思ひ奉らず。

(平家物語・卷三)

○たとひ行おろかなりといへども廻向甚深なれば皆其の願ひを遂ぐ。

(発心集・七ノ三)

○いづれも嘆きのをろかなことわござらなんだれども……

(天草本平家・卷一)

○これぞよしや、難波の大寺にたたせ給ふ愛染明王、役者おろかならず祈りて……

(西鶴・男色大鑑・卷四)

## II 「疎」……「言へバオロカナリ」式の慣用句

「……と言ふもオロカナリ」「……と申すもオロカナリ」などの慣用句として用いられ、「まだ言葉が十分でないさま」「表現しきれないさま」を表すもの。中古で現れ、近世まで質量共に非常に多く出て来るので、Iの「疎」から派生したものであるが、一グループとして別に立てた。

○六月になりぬれば音もせずなりぬる、すべていふもおろかなり。

(枕草子・四十一段)

○行末までの御有様申もをろかなり。

(今鏡・卷三)

○怖(オソロ)シト云へバ愚也や。

(今昔物語集・卷十二ノ二十八)

○院中の騒ぎ中々申すもをろかなり。

(御伽草子・文正さうじ)

○十善帝位の御果報、申すもなかなかをろかなり。

(平家物語・卷十一)

○にぎやかさ申もおろかな事でござる。

(狂言・大名・ぼくがしら)

○「絵入読本ならば身毛もいよだつばかりにて怖しなどもおろかなり。

(浮世床・二編卷之上)

## III 「愚」……①知恵が足りない、愚鈍である

古くから使われてはいるが、上代・中古の作品では用例数が少ない。中世に入ると、非常に頻繁に出て来るようになり、近世を経て、現代でも多用されている。

○相共に賢愚(カシコクヲロカナルコト・北野本訓  
鑑(みみかね)の端なきが如し。

(日本書紀・推古天皇十一年)

○「若シ覺り明ラムル心無クハ常ニ愚カニ可暗シ。

(三宝繪詞・上)

○本性のおろかなるにそへて子の道の闇にたちまじ  
り……………

(源氏物語・若菜上)

○其ノ檢非違使極テ愚也ケル者也。

(今昔物語集・卷二十九ノ十五)

○おろかなる人といふともかしこき犬の心におとら  
んや。

(徒然草・百七十四段)

○時に臨みてにはかに難き題をたまはせてうちうち  
詩を作らせ歌を詠ませて、賢く愚かなりと御覽じ  
わくに……………

(増鏡・卷十三)

○スヘテ賢人モ万慮ニ一失アリ。愚ナルモノモ千慮  
ニ一徳アリ。

(十訓抄・上)

○賢人ノ愚カニシテイルハ罪ヲ恐ルルニ依……………  
(毛詩抄・一八)

○色道におぼれ若死の人こそ愚なれ。

(西鶴・好色二代女・卷二)

○愚なるものを駿遠にてひやうたくれといふ。

(東海道中膝栗毛・二編上)

III 「愚」……………②つまらない、くだらない

中世になって現れた用法で、近世作品にも出ては  
来るが、使用例はそれほど多くない。形式的には  
会話文中の感嘆文で用いられている場合がほとん  
どである。

○「おろかにも問ふかな。

(宇治拾遺物語・八ノ四)

○「おろかの殿の仰言かな。

(御伽草子・あきみち)

○「あら愚の仰や候。

(謡曲・賀茂物狂)

○「いかやうなる者ぞとはおろかなるとひ言かな。

(狂言・脇・あびす大黒)

○「愚なる事を申人かな。

(西鶴・男色大鑑・卷二)

III 「愚」……………③未熟である、下手である

「愚」の①が理解力・判断力において劣っている  
ことを示すのに対し、技術的未熟さを表している。

中世で出て来て、近世作品にも使われてはいるが、数量的には少ない。

○かしこき人のこの芸におろかなるを見て、己が智に及ばずと定めて……

○もとより不足なる手なるを、愚かなる下地に交ふれば……  
(徒然草・百九十三段)

○武芸おろかならぬ人なりしが……  
(世阿弥・至花道)

(西鶴・男色大鑑・巻四)

### III 「愚」……④劣る、足りない

二つのものを並べて、その間に優劣のつかないことを表すもので、近世に入つて初めて見られる、特殊な用法である。例は少ない。

○上臈の御姿を見るにいつぞや清水にて見申せし姫にては無し。さていづれ愚ならん。

(仮名草子・恨の介・下)

○牡丹・芙蓉の色をあらそふ、いづれ愚ならず。

(西鶴・男色大鑑・巻六)

○くびくゝるものどつくもしぬるにおろかの有物か。  
(近松・心中天の網島)

以上、オロカについては合計六つに分けて考えて来た。続いて、オロソカの方を見ていくことにしよう。オロソカは「疎」の意味だけで、「愚」を表すことはなく、おむね、左のように五つに分けて考えることが出来る。

### I 透き間が多い、まばらな

齒・籠・雲・葉など、本来密な状態にあるはずのものが、ばらばらになって透き間が出来た時に使うもので、例は非常に少ないが、時代的には長く見えている。

○「若し輕み咲(わら)ふ者有らば、當(まさ)に世々に牙齒疎(オロソカ)ニ缺け、脣醜く鼻平み、手脚繚戻(モト)リテ眼目(め)角昧(スガメ)ニなるべし。」といふは……  
(日本靈異記・上ノ十九)

○若菜をおろそかなる籠に入れて……

(源氏物語・手習)

○秋ナレバ柳モ葉ガ疎ニシテサビサビトアリテ・  
・・・  
(中華若木詩抄・中)

## II 簡素な、粗末な、みすぼらしい

I のオロソカから派生したもので、設備・飾りつけ・調度・食物などのほか、抽象的なものまでも対象にしている。上代から中世まで長期間用いられているが、用例数は少ない。

○「臣(やつかれ)既(すで)に不敏(をさな)し。當(まさ)に復(また)何をか言(まう)さむ。但し、其の葬事(のちのわざ)は輕易(おろそかなる)を用(もち)あむ。」  
(日本書紀・天智天皇八年十月)

○御しつらひなどいとおろそかに事そぎてさびしく物心ほそげにしめやかなれば・  
・  
・  
(源氏物語・幻)

○わづかにおろそかなる白屋なり。

(正法眼藏・行持上)

○倚廬(いろ)の御所のさまなど板敷をさげ、葦の御簾をかけて布の帽額(もかう)あらあらしく御

調度どもおろそかに・  
・  
・  
(徒然草・二十八段)

○平治にもまた親類を捨てて参られたれども恩貫わ  
これまたをろそかにあった。  
(天草本平家物語・卷二)

## III そつけない、冷淡な、よそよそしい

人間同士の対処の仕方について、その關係がよそよそしい時に使うもので、上代から近世まで平均して見られる。

○「汝(いまし)若し国神(くにつかみ)を以(も)て妻とせば吾(われ)猶(なほ)汝(いまし)を疎(オロソカナル・山城向神社所蔵本訓)心有り」と謂(おも)はむ。  
(日本書紀・神代下)  
○ヲヤラミチヒク子ノ心サシ今日争カオロソカナラム。  
(三宝絵詞・下)

○むかしのおとこよりもむまれけるちのことは、をろそかにおほゆることほりにまけて・  
・  
・  
(唐物語・二十三)

○銀(かね)遣ふ客ををろそかにして、不断隙(ひ



ま)で暮すは……

(西鶴・好色一代女・巻二)

IV いい加減な、なおざりな、疎略な

このグループに属するオロソカは各時代を通して量的にもっとも多い。その対象も非常に広範囲で、形式的には、左に記すいくつかの例でわかるように、下に打ち消しの語を伴う場合が多い。

○かづらきのおほきみをみちのおくへ遣はしたりけるに、国のつかさ、事おろそかなりとて饗応(まうけ)などしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の大器(かはらけ)とりてよめるなり。

(古今和歌集・仮名序)

○一内蔵寮、穀倉院など公事に仕うまつれる、おろそかなる事もぞ。

(源氏物語・桐壺)

○公事を、ろそかにし狩をのみせはこそは罪はあらめ。

(大鏡・道長)

○心アラン人冥土ノ用意オロソカナルベカラス。

(沙石集・巻七)

○古いぬる人は精神おとろへ淡くおろそかにして、

感じうごく所なし。

(徒然草・百七十一段)

○かやうの習道疎かならば道も絶えぬべきかと苦心の及ぶ所を大かた申すのみなり。

(世阿弥・至花道)

○凡兆には一句僅に十七字、一字もおろそかに置べからず。

(去来抄)

V 劣る、よくない、すぐれない

IVのオロソカから派生した意味で、調査した限りでは、『宇治拾遺物語』に初めて出て来る。中世の作品には散見するが、近世になると、もう見当たらず、したがって、用例はきわめて少ない。

○前生の運おろそかにして身に過たるは利生にあづからず。

(宇治拾遺物語・四ノ一二)

○をろそかなるあちはひ、をちふれたるころもにはしんいの思ひあさからず。

(閑居友・上)

○供養まことならざれば、功德おろそかなり。

(正法眼藏・供養諸佛)

○下地疎かなれば、許す事かなはず。

(世阿弥・花鏡)

右のように、オロソカについては、五つの意味に分けて考えて来た。

以上、オロカ・オロソカそれぞれ例文を挙げて、概観して来たが、ここでもう一度わかり易いように、分類した意味だけを、記してみることにしよう。

オロカ

I

いい加減である、疎略である

II

「言へバオロカナリ」式の慣用句

III

①知恵が足りない、愚鈍である

②つまらない、くだらない

③未熟である、下手である

④劣る、足りない

オロソカ

I

透き間が多い、まばらな

II

簡素な、粗末な、みすぼらしい

III

そっけない、冷淡な、よそよそしい

IV

いい加減な、疎略な

V

劣る、よくない、すぐれない

さて、これらと比較してながめてみると、まずオロカのIIおよびIIIはオロカ独自の用法であって、オロソカには見出だされない。一方、オロソカのI・II・Vはオロソカの方に現れ、オロカの方には出て来ない。

また、オロカのIII④とオロソカのVは意味が似ているが、前述したように、オロカIII④がきわめて類型化した特殊な用法で、オロソカVとの共通性は見出し難い。

となると、共に類似した意味を有し、比較の対象となり得るのは、オロカのIとオロソカのIIIおよびIVである。

ただ、オロソカのIIIの「そっけない、冷淡な、よそよそしい」を表すものは、実は、オロカの考察の際には、わざわざこれを別にして考えなかつたため、この意味群はオロカのIに含めてしまっている。

よって、これからの考察に当たっては、オロソカのように、オロカのIを、「そっけない、冷淡な、よそよそしい」と「いい加減である、疎略である」の二つに分けて、見ていくことにする。

それではまず、今回の調査で、私が参考にした上代から近世までの六十有余の作品のうち、右の二つの意味、すなわち「そっけない、冷淡な、よそよそしい」と「いい加減な、疎略である」がオロカ、オロソカの両方で使用されているものを、左に表示してみることにしたい。

比較してその用法を検討するには、同一作品中において、どのように使い分けられているかを見るのが、きわめて妥当な方法だと思ふからである。

表は、オロカ、オロソカとも上段の数字が「そっけない、冷淡な、よそよそしい」の意味を表すもの、下段の方は「いい加減な、疎略である」の意味に取れる用例数を示している。

大鏡	紫式部日記	源氏物語	宇津保物語	竹取物語	古今和歌集	作品名	
						オロカ	オロソカ
二	○	三六	八	三	○	一	○
五	一	九一	一七	二	一	一	○
○	○	一	五	一	○	一	○
一	一	三	一	○	一	一	○

近松作品	西鶴作品	天草本平家	謡曲	増鏡	徒然草	沙石集	十訓抄	平家物語	発心集
○	○	○	○	一	○	○	一	四	一
一	二	一	二	六	三	一	三	五	二
○	二	○	○	○	○	○	○	○	一
二	一	五	二	一	一	八	一	一	○

右の表でわかるように、同義のオロカとオロソカが使用されていた作品は、わずか十六個である。これは、今回の調査にあたって参考にした作品全体の三分の一にも満たない。

ただ、量的に少ないとは言え、これら十六作品は、時代的には長期間にわたり、また、ジャンルでいうと、あらゆる分野のものが集まっている。

総用例数に開きがあることから、オロカとオロソカでは、数量の差が如実に現れて来ていることは仕方がないが、ともかく同じ意味を表すのに、なぜ、同一作品中で一方はオロカにし、もう一方はオロソカにしたのか、その使い分けの有無を、作品ごとに吟味して行くことにしたい。

なお、ここで問題になるのが、異文があるかどうかという点になる。そこで、それぞれの例につき校異を調べてみたところ、若干の異文が見られた。

特に左に記す作品では、オロカもしくはオロソカの例が一つしかない上に、異文が出て来るので、用例として採用するには、躊躇せざるを得ない。

まず、『古今和歌集』であるが、一例しかないオロソカは、先述のように「かつらきのおほきみをみらのおくへ遣はしたりけるに、国のつかさ事おろそかなりとて・

・・・」という仮名序に使われていたものであった。ところが、この部分、伝俊頼筆卷子本や右衛門切、崇徳天皇御本などの『古今和歌集』では、オロソカがオロカとなっている。

次に、『大鏡』のオロソカの場合は、これもすでに記したが、「公事をころそかにし、狩をのみせはこそは罪はあらめ」という例であった。だが、これも異文が見られ、静嘉堂文庫蔵の古活字本や整版本ではオロソカがオロカで出て来る。

それから、『平家物語』のオロソカは左に記すような例であった。

○又国家を祈奉る事おろそかなりとて。 (巻・二)

右のオロソカは、高良神社本と龍門文庫本ではオロカと書かれている。

続いて、『沙石集』を見ることにしよう。この作品では、「いい加減である、疎略である」の意味を有するオロカが、左に記す一例しか出て来ない。

○眞言ノ功能ハヲロカナル事ナシ。 (巻一ノ八)

右の例は、慶長古活字十二行本の本文であるが、このオロカの部分、梵舞本ではオロソカとなっている。

以上、ここに挙げた合計四つの作品については、各一例しかないオロカもしくはオロソカに異文が見られるので、いずれも確かなものとは言い難く、研究の対象からは外さざるを得ない。

その他のものについても、必ずしも、異文が出て来なかったわけではないが、以下、残った十二作品についてなるべく多くの例に当たりながら、出来るだけ詳細に、オロカとオロソカの用法の違いを探ってみることにしたい。

しかし、いかんせん、今号は、これまで調べて来たオロカとオロソカの意味・用法を振り返ってみることで、だいぶ紙数を費やしてしまった。このまま、考察を重ねていくと、まだまだ頁を増やすことになりそうなので、不本意ながら、今回はいったんここで筆を置くことにし、次号で、「五 オロカとオロソカの比較考察(2)」として、論を進めていくことにしたい。

ともあれ、オロカとオロソカは、同じオロがついていても、『類聚名義抄』のアクセントを見れば明らかのように、オロカの方が上上、オロソカの方は平平と記されていて、同根の語とは決して考えられない。

にもかかわらず、オロカもオロソカも「いい加減である、疎略である」それに「そつけない、冷淡な、よそよそしい」の同義で用いられているということは、その間に、何か微妙な使い分けが存していたとしか考えられない。両語の語源追究も兼ねて、その辺のところを、次回でもう一度詳しく眺めてみることにしよう。

△ 注1 ▽ 各作品の底本については、先の号(

「学習院大学上代文学研究」第17および18号)に記したので、省略する。

また、数字は一回数えただけなので、あるいは少し増減があるかもしれない旨、断っておく。